

平成31年1月（2019年） No. 637

<新年ごあいさつ>

高齢化時代に どう立ち向かうか 験される年

会長 合原一夫

平成時代も今年4月末日で終わり5月1日からは新しい元号がはじまります。思えば私たち大阪ムービーサークル会員は、昭和を生き、平成の時代を乗り越えてきました。当初若かった人も今やすっかり高齢化してきました。それでも相変わらず映像を楽しんで人生を豊かに過ごしている方も多くいらっしゃいます。もっとも高齢で病気には勝てず去っていかれた方もおられます。

前年度広報担当だった前田氏が退会されたのをきっかけに、広報のあり方、例会運営の改革の機運が生じてきたのも時代の流れでしょう。会の運営のお世話をする方々の負担を少しでも減らすのも、高齢化対策の一つと言えましょう。一方、今まで築き上げてきた OMC のやり方を根本的にひっくり返すのもどうかと思いますので、伝統の上に立つ新しい工夫によって切り抜けていけたら良いなあおと思っています。

私も関事務局長も 80 歳後半の高齢者で、いつまで活動できるか天の知るところですが、この際あたらしい風を呼び起こすことをねらって、副会長に「岡本至弘」氏と「進藤信男」氏の二人副会長で運営をリードして頂くことにしました。岡本氏には企画を中心に全般的に、進藤氏には事務局の仕事を主に役割を把握して頂きます。

過去 5 年間の例会状況（下表参照）を見ますと、例会出席者は 1 年前より 22,0 人から 17, 3 人に、出品本数も 12,4 本から 10,1 本に減少しています。この状態が続くと将来が思いやられます。新しい会員をどう増やすかが今年の課題の一つでしょう。ネット時代を活かした方法があると思いますが。

1月例会のご案内

- 第2例会；第3木曜1月17日13時より、同封の出品票に必要事項を記入、特に助言を受けたい作品などお持ちください。後半は「総会」及び各種表彰式を行います
- 新年会；第2例会の日の総会后、会場を5階のレストランに移して開催
- 通常例会；第4土曜1月26日18時より、難波市民学習センター・第4研修室にて開催。
- 年会費未納の方；1万円を会計へお納めください。

平成30年度例会記録

■過去5年間の例会記録

毎年、年末に今年一年間の例会を振りかえって過去4年間と比べてどういう傾向にあるのか調べています。今年の実績は過年度と比べて如何だったか、左記の表をご覧ください。

注1) 出席者及び出品数は通常例会の1例会当たりで、課題コン作品、撮影会作品、第2例会作品を含まない平均値です。

注2) 総本数は通常例会、第2例会、課題コン、撮影会コン等、すべて出品された全作品の合計数です。

■第2例会の実績

第2例会は一般作品のほか課題コン、撮影会コンの出品作品を含めたもので1回当りの平均値と合計本数を示しています。通常例会とほぼ同じような傾向にあり、第2例会も可成り活発に活動している感じです。

年度	会員数	出席者	出品数	総本数
H26	36人	22,8人	13,4本	176本
27	40	24,4	14,0	181
28	38	22,9	13,0	187
29	37	22,0	12,4	205
30	34	17,3	10,1	188

年度	会員数	出席者	出品数	総本数
H29	37	16,8	9,3	75
30	34	16,8	11,1	67

■通常例会、年間最多出席者（12回出席） 江村、岡本、紙本、合原、進藤、関、高瀬、華岡の8氏。
・同、11回出席者；宮崎の1氏

■通常例会、最多出品者・12本出品者；江村、進藤、高瀬、華岡・11本出品者；紙本・10本出品者；中川、山本 以上の各氏。

以上のように、例会に多く出席して例会を盛り上げて下さった方、及び多くの作品を出品して頂いて楽しませて下さった方々に敬意を表し、1月の例会席上で記念品を贈呈いたします。

■年度賞発表 このほど幹事会で検討の結果、次の方々が年度賞に選ばれました。

◎年度最優秀賞「人形浄瑠璃に生きる」河口禮司さん ◎年度優秀賞「あれから7年」中村幸子さん

上記作品はいずれも全国コンで受賞された作品で、OMCとしても作品内容が評価されたものです。

通常例会は188本、第2例会は67本、計255本の中から選ばれた秀作でした。おめでとうございます。

年度賞受賞者には総会の席上で賞状と記念品が贈呈されます。

■前田茂夫氏へ「特別功労賞」

昨年退会された広報担当だった前田氏に対し、長年のご苦勞に対し「特別功労賞」を贈呈することが幹事会で決まりました。総会にお出でになれないので、総会後に感謝状と記念品を郵送いたします。

■第2例会を盛り上げて下さった方々

毎回出席頂いた方；江村、紙本、合原、進藤、関、高瀬、中川、中村、森下の9氏

・毎回作品出品された方；高瀬の1氏・5回出品者；江村、中村、山本の3氏

以上今年もよろしくお願ひいたします。

■臨時世話役会；3月9日（第2土曜）13時から中之島、中央公会堂第6会議室にて。4月からの例会運営の見直しについて意見交換及び役割分担。書記のあり方につき方向決定。

■一泊撮影会；4月13日（土）～14日（日）丹後半島伊根の舟屋と朝妻祭。詳細は1月例会にて資料配布。梅田から直行バスが出ます。



天橋立



伊根の舟屋



伊根湾めぐり成洋丸



新井の棚田

12月通常例会レポート

暮も押し詰った22日難波市民学習センターにて開催。■司会・合原、書記・高瀬、映写担当・中川、記録・進藤、受付・森下、各氏の担当で進行。■出席者；井上、江村、岡本、紙本、河合、合原、進藤、関、高瀬、中川、華岡、宮崎、森下、山本、堀、(見学)の15氏。■新入会者；堀皓二氏。1月から正式会員に。

1、わたしはかかしになった

岡本至弘 8分

奈良県高取町で開かれた「かかし祭り」。城下町で昔ながらの町屋が並ぶ道や家の前にかかしが置かれている。「かかし」と言っても田舎の案山子の変身したようで、子供から老人まで布で作られた人形に近い。作者はそれらのかかしに語りかけるようにカメラを向け、時には一緒に並んで撮影、ユーモラスな作品に仕上げられている。しかし、もっとかかしへの声掛けや、かかしの声をテロップで入れるなどすれば面白さが増すのではという意見が聞かれた。作品はかかしと別れ、

作者が町を去っていくところで終わるが、タイトルが「わたしはかかしになった」なので最後はかかしと一緒に並んで動かず「私は案山子になってしまった」というシーンで終われば…とふと考えていた。なお11月の第2例会では「私はかかし」のタイトルで映写されている。



2、ポルドー

山本正夢 11分50秒

「ワインの里」と副題のついたフランス、ポルドーの街を描かれた作品。朝焼けに煙る街並みから始まり、世界遺産の鐘「ワインの里」と副題のついたフランス、ポルドーの街を描かれた作品。朝焼けに煙る街並み

から始まり、世界遺産の鐘楼のあるサン・ミシェル・バシリカ聖堂、1822年にナポレオンの命で造られたピエール橋、素晴らしいステンドグラスで彩られた11世紀のサンタンドレ大聖堂など歴史的な建造物を紹介。蚤の市の広場やカピュサン市場など庶民的な市場なども巧みに取り入れられている。景観に配慮した架線のないトラムが走る街並みなどを描写した引きの構図は秀逸。そしてワインシャトー巡りで葡萄畑や年代物のワインなどが紹介され、やがて夜の街に戻り街頭で音楽が演奏される中、美しい夜景が展開する。トップシーンから魅力的な映像が続くが、ラストが音楽演奏で終わるのはやや唐突な感じがしないでもない。



2.ポルドー

3、オランダ美術館巡り

中川良三

13分04秒



3.オランダ

オランダの象徴でもある風車のシーンから始まり興味を誘う。特にレク川とノールト川に囲まれた雪の風車の風景は印象的。そしてオランダ第三の都市デン・ハーグに移動、美術館巡りが始まる。そこで驚かされるのが美術館に展示されている世界の名画がいずれも撮影OKということ。ヨーロッパではそうした国が多いそうだが、日本では考えられない。しかも館内は比較的空いている。好条件の中で、作者はマウリッツハイス美術館、アムステルダム国立美術館、クレラー・ミュラー美術館などを訪れ、展示されているゴッホやレンブラント、フェルメールなどの名画をゆっくり鑑賞、撮影されている。世界的な名画、動かない小さな絵画を映像でどう表現するか、難しいところである。

4、イエローストーン公園東部と

グランドテートン国立公園

華岡 汪

9分49秒

11月の作品はイエローストーン国立公園西南部だったが、今回は東部、四国の半分はあるといわれるイエローストーン公園、広いだけにその表情もさまざま。今回の東部はまさに自然の雄大さを体現できるスケールの大きさが魅力のようだ。イエローストーン湖、リハディのラピットを訪れヘイデンバレーの大草原へ。生息する動物を探すも、昼間のため一頭もない。そしてイエローストーン渓谷へ。落差94メートルという目を見張るような大きな滝の映像は見応えがある。次にグランドテートン国立公園へ。標高4197メートルの主峰グランドテートンに連なるテートン連山の雄大な自然が素晴らしい。作者は2日間にわたりこれらの風景を余すことなく撮影されており、まさに大自然の雄大さを満喫させてもらった。



4.1.10

5、武田氏盛衰の跡（後編）

紙本 勝

15分



5.武田氏

10月例会で映写された作品の後編。前編は武田信玄が甲斐の大名から身を起し西上を旨としたが、夢叶わず病死するまでの話。後編は信玄の後継ぎ、勝頼が勢力を広げ、織田信長、徳川家康と対峙し、やがて戦いに敗れ、武田家が滅亡していく姿が描かれている。前後編合わせて30分の労作。それにしても長野、山梨、愛知、静岡、群馬、京都6府県に残る城址や史跡などを実際に訪れ、手を抜くことなく撮影されているのには驚かされる。よほど事前の準備をし、ストーリーを組み立てておかないと出来ない作品である。城址などに合戦の映像をダブらせたり、ラストの辞世の歌など話の盛り上がりもよく考えておられる。ただ、次から次へと武将や合戦の話の展開が早く、中には息をつがせてもらえるようなシーンも欲しい。

6、空也の滝

高瀬辰雄 7分30秒

平安時代の僧で浄土教の祖とされる空也上人が修行したといわれる滝をテーマにした拙作。空也の滝は清滝から 2.5 キロ、愛宕山の月輪寺登山道の傍にある。観光で訪れる人はほとんどいない。修験道場もあり、今も滝行の修行場として神秘的な趣を持っている。空也の滝を訪れたのは 40 年ぶり。40 年前は滝行をする人に同行し、8 ミリフィルムで滝行の模様を撮影させてもらった。今回はそのフィルムをテレシネにして挿入したが、現場で感じた神秘的な雰囲気が出せたかどうか？。



7、諏訪神社霜月祭

河合源七郎 14分45秒



信濃の国、遠山郷。12 月に入ると郷に笛や太鼓の音とともに神楽歌が流れる…と、南アルプスや日本のチロルと呼ばれる下栗の素晴らしい風景の映像に合わせて、ナレーションで遠山郷と霜月祭を紹介。霜月祭は遠山郷のいくつかの神社で行われるようだが、今回撮影されたのは秋葉街道の宿場町、和田の諏訪神社。煮えたぎった湯釜を囲み、踏みならしの舞から始まり、湯開き、湯立神事、禰宜による火伏せと全国の神様を迎える準備が進む。さまざまなカメラアングルで祭の雰囲気を表現されている。そして水の王、火の王、秋葉大明神、猿など面を被った神々が登場し、煮えたぎった湯を素手ではねかける。スローも交え、迫力あるシーンが続く。やがて神送り、粕舞、最後のひいな降ろしが舞われ神にお帰りを願い、祭は終わる。湯釜を囲んでの神事のシーンに集中する嫌いはあるが、夜半まで続く長い祭りを余すことなく撮られた力作と言える。

8、生命の樹復活のイルミネーション

進藤信男 12分55秒

昭和 45 年（1970 年）に開催された大阪万博の当時の映像から万博記念公園を紹介。公園内で憩う家族連れやもみじ川などの紅葉で過ぎゆく秋の季節感を出されている。70 年万博の象徴でもあった巨大モニュメント、太陽の塔が夕景に浮かぶ。今年 3 月から太陽の塔の内部が公開され、しばらく行方不明になっていたという生命の樹が復活、展示されている。今回のイルミネーションは地底の太陽、生命の樹が復活してから初めてのものとかな。太陽の塔には生命の誕生から哺乳類への進化、そして生命の樹へといった映像が映し出され、これをロング、アップと画面サイズに工夫しながら撮影されている。イルミネーションが終わると、2025 年に開催される大阪万博が「いのち輝く未来社会のデザイン」を志向、来年 2019 年はその第一歩を踏み出す年であると結び、新しい年を迎えるにふさわしい締めくくりでまとめられている。



9、牡鹿の嘆き

堀 皓二 5分00秒

今月はゲストとして出席された作品なので、講評は控えるが、さすがに数々のコンテストに入賞経験をお持ちの大ベテランの好作品。奈良の鹿を擬人化し構成された作品作りの巧みさには感服するほかはない。



10、よさこい始動

江村一郎 8分00秒



本場高知でのよさこい。ステージの上での踊りから始まるが、撮影ポジションはかなり後方。人の頭で遮られるシーンもある。しかし、さすがは江村さん、難しい位置からの撮影を逆手に取って、前の人のスマホに写る映像を撮られたり、後を向いた子供やびーをもつてのアップなど巧みな映像でうまくまとめられている。続いて夜空に花火が上がり、この花火の映像に踊りをオーバーラップ。踊りは昼間のシーンもあり、これにも花火を重ねて編集されている。昼間のシーンにそのまま花火を重ねるのは無理があるのか踊りの映像をモノクロにするなど苦心されている。ちょっと違和感があるという声も聞かれ、大成功とは言えないまでも、よさこいと花火の組み合わせは面白い試みであるのは間違いない。